政治の動きと学術会議問題

毎日新聞11月13日夕刊「元文科官僚　寺脇研氏Ｘ前川喜平氏　学術会議問題に迫る」が示唆に富む。前半を中心に抜粋して紹介する。

元文科官僚 寺脇研氏×前川喜平氏　学術会議問題に迫る

菅氏迷走 任命拒否の深層は

邪魔な存在つぶす意図　前川氏

学問軽視のなれの果て　寺脇氏

寺脇　あらゆることの根を考えると、文化や歴史、学術に対する敬意が失われていると感じる。大阪維新の会が推進した「大阪都構想」はその象徴です。

私が文化庁に勤めていた2000年代初め、臨床心理学者の河合隼雄さんが長官に就任し、「関西元気文化圏構想」を提唱しました。東京は経済一辺倒だが、関西は文化を軸に、独自の道を進もうという取り組みです。当時の関西の自治体や財界はこぞって賛同しました。ところが今、関西ではカジノを誘致したり、万博を開こうとしたりと、金の話ばかりだ。大阪都構想は伝統ある大阪市をなくし、経済的・合理的な運営をしようという話ですよね。文化的退廃のなれの果てという気がする。そして日本のトップには文化に敬意を払わない人が立った。菅首相がこの間に面会した人の顔ぶれを見ると、経済関係者は多いが、学術や芸術関係は極めて少ない。安倍晋三首相はまだ文化に敬意を払う〝ふり〟をしたが、菅首相はそれさえしない。

前川　菅首相という人は金と権力以外に関心がないのではないか。理念やビジョンがないと言われるが、その通りだと思う。菅政権で一つよかったのは、経済産業省の官僚が牛耳る「経産省内閣」ではなくなったこと。「アベノマスク」をはじめ、経産官僚が思いつきで政策を打ち出すことは減るでしょう。ただ、菅首相自身が国会答弁で明らかにしたように、学術会議の任命拒否には警察庁出身の杉田氏が介入している。菅氏が官房長官の時からそうだったが、菅官邸の手法は、警察官僚的な部分がもっと強まるのではないか。カリスマ性や人気取りの政策で支持を得ようとするより、人事や情報操作で権力を維持する方向に向かうと思う。政策としては、金で測れるものに価値があると考える傾向に拍車がかかるでしょう。学術や文化には本来、金で測れない価値がある。真理に値段はつけられないからだ。だが「もうかる研究をしろ」「かせげる人間を育てろ」という方向にどんどんシフトしていく恐れがある。学術や文化は「学問の自由」や「表現の自由」など憲法が保障する一番大事な原理に直接関わっています。自由であるべき領域に、権力が容赦なく入ってこようとしている。

前川喜平さん、寺脇研さん、お二人ともさすが鋭い指摘が多い。前川さんの講演を聴いたことがある。寺脇さんには2年前に愛知県刈谷市で開催された「第13回障害者の高校進学を実現する全国交流集会」で基調講演していただき、そのとき司会をつとめたので、とりわけ印象深いものがある。

（2020年11月17日）